

連載 （供覧）いはひまつりのみち

宗教は人を殺し、祭祀は人を生かす  
世界平和のための祭祀を復興させる

### 第三十五回 貨幣の虚構と宗教の虚構

南出喜久治（令和8年2月1日記す）

ちちははと とほつおやから すみめおや やほよろづへの くにからのみち  
（父母と遠つ祖先から皇御祖八百万神への国幹の道）

ユヴァル・ノア・ハラリは、前掲の『サピエンス全史』の著作の中で、人間は集団で虚構を共有する唯一の動物であり、それゆゑに神の名の下での集団行動や、貨幣といふ虚構を信頼しての分業をできるやうになつて、他の動物に卓越できたとし、共有された虚構の典型例は貨幣であると述べてゐます。

これは、経済学の領域で言へば、貨幣が共有された虚構といふことは、貨幣の本質を知らないまま、貨幣の価値を信じて分業体制が構築されてゐるといふことで、経済が虚構の体系であるといふことです。

虚構であつても、貨幣に価値があると信じてゐるために分業体制と資本主義は維持されます。ですから、資本主義の弊害をなくすためには、貨幣の本質を明らかにして貨幣制度の虚構を暴くことから始めなければなりません。

ところで、ハラリは、ここで「神の名の下での集団行動」も虚構であると言つてゐます。これは、ハラリの信じるユダヤ教のみならず、すべての宗教が虚構であると言つてゐることになります。

集団行動が虚構であれば、その集団行動を支へるのは、共同の観念であり、それは言語が介在します。

言語によつて共通の観念が生まれます。貨幣への信頼も言語を介在して生まれます。つまり、人間は、言語を持つことによつて、共通の観念を創出し虚構を共有するといふことです。それが他の動物と異なるところだとするのです。

神の名の下での集団行動だけが虚構ではなく、宗教自体が虚構であるとハラリは考へてゐるのだと思ひます。

金融資本主義に毒された虚構の通貨制度から、貨幣の本質に根差した真正な貨幣制度に移行させることが、資本主義の経済から、真の経世済民を実現することになります。このことの詳細については、拙著『國體護持総論』第六章（改訂版）をご覧になつてください。

ともあれ、祭祀には、貨幣を使ひません。神人共食のためのお供へ物しかありません。論理的思考や説明の祝詞も使ひません。神人の間の会話は、論理的な言語ではなく、魂を震はせる和歌によります。

しかし、宗教は、何もかも貨幣が中心です。現世利益を求めるときは言語で行ひます。

つまり、物神論からすれば、貨幣は神であり、貨幣も宗教も虚構であつて、世界は虚構で溢れ返つてゐるといふことです。

そして、貯蓄と投資といふ財貨の運用の在り方についても、小アジアにおける農業民と牧畜民と相違が原点となつて形成されます。

農業民は、財産運用において農業生産物を消費対象以外は「貯蓄（貯蔵）」します。しかし、放牧民は、家畜を殖やすことを「投資」と考へるのです。家畜は、貯蓄（貯蔵）ができません。寿命が短く病気で死に絶えることがあり、何よりも食物として費消するので、家畜数は増減して変動するのです。

そこで、家畜を殖やすこと、つまり、子を作らせて頭数を増やすことが資産運用において必要になります。それが投資といふことです。法律的には家畜の子は、法定果実と言ひます。簡単に言ふと家畜集団から生み出される「利子」です。これが資本主義における投資経済の原型なのです。資本（capital）の語源は、羊の頭のことなのです。

そして、資本である家畜の利息（子）の概念がさらに貨幣そのものを資本として捉へられるのです。管理が難しい家畜よりも貨幣の管理は極めて容易なので、資本は、家畜から貨幣とスライドすることは必然的なことです。それが貨幣資本の利息へと移行します。そのために、利益追求をすることに歯止めがなくなり、利息は高利となり、著しい経済格差が生まれます。

その利息を制限したのが3800年前のハンムラビ法典です。現在でいふところの利息制限法とか出資法のやうなものです。ところが、ユダヤは、利息を法外にとることを禁止しませんでした。ここに金融資本主義によるユダヤによる世界経済支配が容易となつた原点があるのです。

現代における凄まじい金融資本主義の矛盾は、貨幣制度の誕生において身ごもつてゐた始原的な虚構にあります。これが宗教の虚構と相俟つて、世の中を荒廃させ続けてきた元凶なのです。

ところで、旧ソ連の弾圧に非暴力で立ち向かつたソルジェニーツィンは、「権力は、その力を高めるために、自らを偽装するのである。」と述べましたが、正鵠を得た言葉です。

暴力装置を保有して国民の行動を制圧する国家も「権力」ですが、信心を捨てると地獄

に落ちるといふブラフによる恐怖で信者の精神を制圧する宗教もまた「権力」です。

その宗教といふ権力によつて、偽装祭祀の拝礼を求められ、父母を敬ふことを超えて祖先崇拝を行ふことを絶対に禁止する宗教は、まさに虚構によつてその権力を偽装してゐると言へるのです。

ニーチェは、「信念は真実にとつて嘘よりも危険な敵である。」と言ひました。これは、宗教者が、自己の信じる宗教が絶対であるとする信念は、信者や非信者にまき散らす宗教の虚構による嘘よりも危険であること言ひ表したもののといふことなのです。